

鳥の渡り（ウェブサイト）

鳴門海峡は、渡り鳥を見るのに日本で最も適した場所の 1 つです。堂々とした猛禽類が四国と淡路島の間を渡ります。特にノスリの仲間（ノスリ属の鳥で、北アメリカでは一般的にタカと呼ばれている）がこのルートを好みます。毎年春と秋の渡り鳥の季節になると、多い日では 1 日に 1,000 羽の鳥が渡り、多い時間帯にはほとんど途切れることなく列をなして渡っていく群れが見られます。

以下は、鳴門海峡を渡る主な 4 種を、数が多い順に並べたものです。ノスリ以外は全て IUCN の絶滅危惧種レッドリストに登録されています。

サシバ（毎年 3,000-5,000 羽が見られます）

ハシボソガラスと同じくらいである体長 50cm まで成長するこの鳥は、とても大きな群れをなして渡ります。飛んでいる時には羽の下端はすっきりとした直線状になり、止まっている時には羽の先端は尾の先端近くに達します。

ノスリ（別名ニホンノスリまたはトウヨウノスリ）（毎年 2,000-3,000 羽が見られます）

羽が長く尾が短いこの薄い灰褐色のこの猛禽類の鳥は体長 50 から 60cm で、下の地面の獲物を探す際には空中に静止してホバリングしているように見えます。オスとメスは外見がかなり似ており、見分けるのが難しいです。

ハイタカ（毎年約 300 羽が見られます）

ハイタカは成鳥になると体長 30 から 40cm になります。羽は短く幅広で丸みを帯びており、獲物を捕まえる際には急に減速したり向きを変えるなど、小回りのきいた飛び方ができます。

ハチクマ（トウヨウハチクマ）（毎年約 300 羽が見られます）

この鳥は、鳩のような小さな頭部、長く丸みを帯びた尾、および大きな翼幅が特徴です。翼幅は最大 155cm にもなります。分厚く硬い羽毛で、ミツバチに刺されるのを防いでいます。

渡りのルートと季節

サシバとハチクマはどちらも、春から秋にかけて日本で繁殖し、その後インドネシアやフィリピンの南部に移動します。その際、東から西に鳴門海峡を渡ります。春になると、これらの 2 種は日本に戻り、鳴門海峡を逆の方向に渡ります。ハイタカは逆に、秋に中国から日本に飛来する際に鳴門海峡を西から東に渡り、冬を日本で過ごします。ノスリは夏に日本の北部に渡り、冬に日本の南西部に移動します。

秋の渡りは9月から11月に行われます。鳥たちは日の出前後から飛び立ち始め、空を飛ぶ鳥の数は午前10時から午後2時の間に最大となり、特に晴れた日に多く見られます。春の渡りは3月中旬から6月上旬となります。